



Title	黄遵憲「降將軍歌」について
Author(s)	ファンダム, トム
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2019, 53, p. 33-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81485
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

黄遵憲「降將軍歌」について

ファンダム　トム

キーワード：黄遵憲／日清戦争／丁汝昌／北洋艦隊

一、はじめに

日清戦争が終幕を迎えるようとしていたとき、北洋艦隊の提督丁汝昌は、日本軍に投降した直後にアヘンの服毒で自決を遂げた。丁汝昌の自殺は敵味方問わず驚きをもつて迎えられ、戦後も賛美・非難・哀悼の対象とあつた。日清戦争について多くの作品を書いた詩人黄遵憲も丁汝昌の死を作品に取り上げた。当時、日本の新聞、文学作品などでは丁汝昌の「殉死」を賛美する傾向があつたが、黄遵憲の丁汝昌に対する評価は非常に複雑であり、その真意は読み取りにくいものである。本論文では詩の翻訳と解釈を行いながら、黄遵憲が丁汝昌の自殺をどう見たかについて検討したい。

二、丁汝昌の生涯や威海衛の戦いの流れ

丁汝昌は一八三六年に安徽省に生まれた。一八五四年に太平天国の乱に関わったが、一八六一年に降伏して淮軍に

入つた。⁽¹⁾一八七五年、李鴻章に雇われ、北洋艦隊に従軍し、一八八八年には提督に昇進した。日清戦争が始まつた一八九四年、丁汝昌は北洋艦隊を率いていた。最初に鴨緑江の河口である大東溝で日本軍と戦つたが、旗艦の「定遠」で指揮していた時に砲撃を受け負傷した。軍艦五隻を失つた北洋艦隊は旅順の戦いに際しては、戦わず撃沈される。本部の威海衛に逃亡し、その結果として朝廷は丁汝昌を激しく弾劾したが、李鴻章は彼の地位を保証した。翌年の一月には日本軍の連合艦隊が威海衛に進出し、さらに日本の第二軍は二十六日に榮城を占領し、三十日に北と南の要塞を同時に攻めてきた。二月二日にはついに威海市が占領された。丁汝昌は北洋艦隊の海軍基地劉公島からの援軍を待つていたが、それは実現せず、連合艦隊と数日海戦を行つた。この海戦で「来遠」と「威遠」二隻が撃沈される。結果として丁汝昌は十二日に降伏を宣し、劉公島の自室でアヘンによる自殺を遂げた。

三、「降將軍歌」の翻訳と解釈

黄遵憲は「降將軍歌」だけでなく、戦争の経緯を追つて「悲平壤」、「東溝行」、「哀旅順」、「哭威海」、「度遼將軍歌」、「馬關紀事」、「臺灣行」など、日清戦争に関する連作の叙事詩を書いており、それらは『人境盧詩草』に収められる。同書に注釈を施した錢仲聯『人境盧詩草箋注』によると、「降將軍歌」も含めて、これらの詩はすべて『人境盧詩草』の初期の原稿ではなく、戊戌（一八九八年）、つまり戦争の三年後に帰郷した際に補作されたものである。

黄はこの「降將軍歌」によって祖国の宿命を哀悼しながら敗戦の責任を負うべき朝廷、陸軍・海軍などを激しく批判している。外交官として、海外在住の経験が豊富で、長年にわたり改革派に関わっていた黄遵憲にとっては、日清戦争の敗戦は近代化の失敗の象徴でもある。

降將軍歌

衝圍一舸來如飛

衆軍屬目停鼓鼙

船頭立者持降旗

都護遣我來致詞

我軍力竭勢不支

零丁絕島危乎危

龜鱉小豎何能為

島中殘卒皆瘡痍

其餘鬼妻兵家兒

鍋底無飯枷無衣

紇干凍雀寒復饑

六千人命懸如絲

我今死戰彼安歸

此島如城海如池

橫排各艦珠累累

有礮百尊槍千枝

亦有彈藥如山齊

降伏した將軍の歌

一隻の船はまるで飛ぶように包囲を突破し、

すべての軍人はそれに目をとめ、太鼓をやめる。

船頭に立つ人は降伏の旗を持ち、

「提督は我を次の台詞を伝えるために遣わされた」といった。

「我軍の力は尽き果ててもう耐えられない、

このうらぶれて孤独な島で危険にさらされ、

小さな亀の我々はどうしようもない。

島にいる我軍の兵士はみなが負い、

残るのは寡婦や幼児ぐらいのもの。

鍋の底に飯はなく、衣服掛けに服はない、

紇干の山に凍える雀のように、寒くて飢えている。

六千人の命は一本の糸にかかっている、

我はいま死ぬまで戦い抜いても、彼らは無事に家に帰れるだろうか？

この島はとりでのごとく、海は堀のごとく、

我軍の軍艦は真珠の首飾りのように一列に連なる。

大砲は百門、銃は千丁を備え、

しかも弾薬は山ほど積み重ねられている。

全軍旗鼓我所司

本願兩軍爭雄雌

化為沙蟲為肉糜

與船存亡死不辭

今日悉索供指麾

乃為生命求恩慈

指天為正天鑒之

中將許諾信不欺

詰朝便為受降期

兩軍雷動懼聲馳

燐青月黑陰風吹

鬼伯催促不得遲

濃薰芙蓉傾深卮

前者闔棺後輿屍

一將兩翼三參隨

兩軍雨泣咸驚疑

已降復死死為誰

可憐將軍歸骨時

全軍の旗や太鼓は我が指揮に従い、

もとより望むのは両軍が最後まで戦うこと、

虫のようにつぶされ、ひき肉にされることも恐れず、

船とともに存亡を賭け死すら辞さない。

今日はすべての指揮をあなたに託し、

慈悲を請うためにここに参った。

天に対して正しさを誓えば、天はその証をくださる。」

敵の中将はそれを受諾し、約束を守ると誓い、

翌朝から降伏を認めることにした。

両軍は雷のように喜びの声をあげたが、

鬼火は青く燃え、薄暗い月にまがまがしい風が吹き、

閻魔大王は厳しく促して遅刻を許さない、

提督は濃厚に香る芙蓉の毒を大きな杯から飲みほした。

前の者は棺を閉ざし、後の者は死体を車に乗せ、

一人の将軍、二人の副官、三人の参謀が提督の棺に伴う。

清軍も日本軍も雨のように涙し、人々はみな茫然と途方に暮れた。

なぜ降伏したのに死を選んだか？ 誰の為に死んだのか？

哀れな将軍のなきがらを郷里に帰すために船に乗せたとき

白幡飄飄丹旗垂
中一丁字懸高桅
迴視龍旗無才遺
海波索索悲風悲

弔い白旗はひゅうひゅうと風に翻り。赤い旗はうなだれた。
高い帆柱に掲げられ旗の真ん中に「丁」の字が書かれていたが、
振り返れば清の龍旗は跡形もなかつた。
海の波はものさびしく揺れ、風は悲しくうめいている。
悲しいかな ああ、ああ、ああ

詩の前半は、清の船が降伏の旗をもつて丁汝昌の手紙（請降書）を日本軍に渡しに来たことについて述べている。⁽¹⁾
黄遵憲はその実在する手紙の内容を詩の一部として用いている。詩の中の手紙の大部分は歴史上の手紙の内容と一致している。しかし、もとの手紙は公文書のため、黄遵憲は表現に脚色を加え、詩として作り直した。彼は請降書の一部を取り上げ、それに比喩を加えることで詩情のある雰囲気を生み出したのである。例を挙げると、請降書の中の「本提督初ハ飽マデ決戦シテ艦沈ミ人尽キ」は「我軍の力が尽き果ててもう耐えられない、この落ちぶれて孤独な島で危険にさらせれ、小亀の我々はどうしようもない」として詩に表現されている。また、黄は請降書の最後にある「若シ此等諸件承允セラルルニ於テハ英國艦隊司令長官ヲ以テ証人ト為スベシ」を「天に対して正しさ誓えば、天はその証をくださる」と書き改めた。黄遵憲はおそらく詩的な演出効果を高めるために「英國艦隊司令長官」を「天」に置きかえたのである。

詩の後半は叙事体に戻り、丁汝昌の自殺の前後について述べている。黄遵憲は「鬼火は青く燃え、薄暗い月にまがまがしい風が吹き、閻魔大王は厳しく促して遅刻を許さない」と不幸の前兆を用いて、丁汝昌の死が差し迫っていることを示している。丁汝昌のアヘンによる自殺の瞬間はドラマチックに描かることなく、「提督は芙蓉の毒を濃

く焼き、それを大きな杯から飲み込んだ」という短い一句で淡々と表現されている。そのうえで、降伏の直後の喜びと対照的に、両軍ともに丁汝昌の死を悲しんでいたことが述べられる。日本軍は提督のために厳かな儀式を行い、北洋艦隊のもと軍艦「康濟」に弔いの白い旗は高々と風に翻つており、赤い旗は動かすにうだなれている。さらにその中央には、提督の姓「丁」が書かれた旗が高い帆柱に掲げられるが、清の国旗であった「龍旗」の形跡はなかつた。黄遵憲にとって、これは悲しみ極まりないことであつたであろう。

だが、果たして黄遵憲は丁汝昌の死を純粹に悲しんでいたのだろうか。表面上は丁汝昌の自殺を悲しむ詩に見えるものの、その一方で丁汝昌を風刺するところも「降將軍歌」にはいくつか存在する。丁汝昌を直接に揶揄する表現は見られないが、風刺の意を含むのは明らかである。その風刺は文頭からすでに隠されている。「降將軍歌」は文字通りに降伏する将軍の歌を意味するが、黄遵憲は同時に三国志の故事を重ね合わせている。一一一年、劉備が江州を攻めたとき、張飛は嚴顎という将軍を捕虜にした。張飛がなぜ投降しなかつたかと嚴顎に聞くと、彼は「わが州には首が斬られる将軍はいるが、投降する将軍などはない」と答えた。この故事を踏まえてタイトルを読むと、丁汝昌は勝ち目がないにもかかわらず死ぬまで戦う嚴顎のような勇猛な武将ではなく、降伏を辞さない懦弱な将軍であることが示唆されていると読み取れる。また、詩中の手紙では丁汝昌は「大砲は百門、銃は千丁を持っており、しかも彈薬は山ほど積み重ねられている」などと北洋艦隊の実力を誇るのに、敗戦によつてそのすべてを敵に譲ることとなつた。中国の讀者にとって、それは受け入れがたいことであつただろう。

もつとも讀者に風刺を感じさせるのは「清軍も、日本軍も雨のように涙し、人々はみな途方に暮れた。なぜ降伏したのに死を選んだか？誰の為に死んだのか」の二句である。「なぜ降伏したのに死を選んだか？誰の為に死んだのか」という兵士たちの台詞は、黄遵憲自身の考えとも見なせる。黄遵憲の視点から見ると、もし丁汝昌が嚴顎のような勇

ましい武将であれば、命を懸けて国に報いようと考へられる。また一方、もし彼が兵員の安否のために投降するならば、己の命を保つて、将来、名譽挽回を試みるだろう。丁汝昌にはこの二つの合理的な選択肢があつたのに、降伏し、自決した。黄遵憲はその理不尽な行動を風刺したのである。

「哀れな將軍のなきがらを郷里に帰すために船に乗せたときに、弔いの白い旗がひゅうひゅうと風に翻り、赤い旗はうなだれ」は丁汝昌に対しての哀れみに見えるが、清の政府に対する批判として読み取ることもできる。日本軍が敵の將軍に厳肅な葬儀を行つたのに対し、光緒帝は丁汝昌の自決について聞くと彼を責め、葬儀を許さなかつたという。「振り返つてみれば清の龍旗の形跡はなかつた」の一行は、そのことを踏まえたものであろう。丁汝昌にとつては極めて皮肉な詩句と言える。祖国からは激しく責められたのに、彼を自殺にまで追い込んだ日本軍が提督に厳かな儀式を与える。それはまさに皮肉で悲しむべき宿命であつた。

四、終わりに

一見すると、「降將軍歌」は單なる哀悼を表す作品であるように思われる。しかし、黄遵憲は題名の時点ですでに三国志の典故によつて、また自決後の悲しくて皮肉な描写によつて確實に丁汝昌を風刺している。しかし、黄遵憲は必ずしも丁汝昌を揶揄する意図はなかつたと考えられる。最後に「悲しいかな、ああ、ああ、ああ」という丁汝昌への同情とも受けとれる詩句が置かれているのを見ると、本詩の諷刺は、彼にそのような運命を強いた状況に対してもけられていると言つべきではないだろうか。

〔注〕

(1) 金山泰志『明治期日本における民衆の中国觀』芙蓉書房出版、二〇一四年、二三九頁。

(2) 丁汝昌の生涯の情報では、民国・清史稿『丁汝昌列伝』卷四六七を参考した。

(3) 黄遵憲著、錢仲聯注『人境廬詩草箋注』上海古籍出版社、一九八一年、卷八。

(4) J.D. Schmidt, *Within the Human Realm* (Cambridge University Press) 1994 に英語訳台があり、島田久美子注『黄遵憲（中国詩人選集15）』岩波書店、一九六三年に日本語訳も収められる。本論文では自訳を用いる。原文は黄遵憲著、錢仲聯注『人境廬詩草箋注』上海古籍出版社、一九八一年、卷八のまま。

(5) 降伏文書の原文は黄遵憲著、錢仲聯注『人境廬詩草箋注』上海古籍出版社、一九八一年、卷八に収められる。原文は「革職留任北洋海軍提督軍門統領丁，為咨會事…照得本軍門前接佐世保提督來函，只因兩國交爭，未便具覆。本軍門始意決戰至船沒人盡而後已，今因欲保全生靈，願停戰，將在島現有之船及劉公島並炮台軍械，獻與貴國，只求勿傷害水陸中西官員兵勇民人等之命，並許出島歸鄉，是所切望，如彼此允許可行，則請英國水師提督作證。為此具文咨會貴軍門，請煩查照，即日見覆施行。須至咨者。」とある。

(6) 『三国志』蜀書・張飛伝』卷六からの原文は次の通り。「建安十九年劉備進攻江州，嚴顏戰敗被俘，張飛對嚴顏說：“大軍至，何以不降而敢拒戰？”嚴顏答說：“卿等無狀，侵奪我州，我州但有斷頭將軍，無降將軍也。”」

(7) 民国・清史稿『丁汝昌列伝』卷四六七に「事聞，諸將皆被恤，汝昌以獲讃，典弗及。宣統二年，海軍部立，舊將請賜恤，始復官」

SUMMARY

On Huang Zunxian's "Song of a Surrendering General"

Thom van DAM

This paper takes an in-depth look at Huang Zunxian's (1848-1905) poem "Song of a Surrendering General", which he wrote about Ding Ruchang, Admiral of the Beiyang Fleet during the First Sino-Japanese War of 1894-1895. After Ding surrendered his forces to the Japanese after the battle of Weihaiwei in February 1895, he decided to commit suicide by ingesting opium. Huang's poem is set after his surrender and suicide and is divided into two parts, Ding's letter of surrender and a subsequent lamentation. This work is part of a series of poems which Huang wrote about the Sino-Japanese War. In these works he straddles the divide between mourning the loss of the war for his native country and satirizing the failures of his government, the army and some of its prominent actors. Huang's poem on Ding Ruchang at first glance seems to escape the scathing criticism and poignant satire in some of his other works, but despite the overall mournful tone of the poem, certain elements of the poem also betray bitter criticism of admiral Ding's tragic end.